

足跡は足跡が消し地に埋もるサバンナを生き、去りしものたち 三宅徹夫

「去りしものたち」とは、文字文化を持たなかったアフリカの人たち、あるいは、アフリカの野生動物たちを指しているようだ。文字がないということは、歴史がないということである。大問題をたんとたとうたつて心に残る。こう歌われると、なまじ歴史なんか持たない方がすがすがしいような気がしてくるから不思議。

鵬外の書き込みならむ『ファウスト』に切れ味のよき独逸語光る 松岡秀明

東大の図書館にある「鵬外文庫」の一冊を開いての一首。「切れ味のよき独逸語光る」が、鵬外らしさを表現して楽しい。独逸語に堪能な作者ならではの表現である。なお、鵬外の『ファウスト』の日本語訳には、佐佐木信綱が関わっている。訳の点検を信綱が鵬外に頼まれたからである。頻繁に観潮楼に通ったらしい。

海に向く人頭石碑と島歴史かたり尽きざりき谷川先住 住正代

「人頭石碑」は宮古島の人頭税石。その高さに身長が達すると徴税されるという石柱で今も残っている。「谷川先生」は去る八月二十四日に九十二歳で世界された民俗学者・谷川健一さんのことである。沖繩、宮古の話になると夢中になった谷川さんを彷彿させる追悼歌。

わが畑に縄張り求めて雉が鳴き狸が樹陰に糞を積み つつ 水本光

短歌の現在

No.393

今月の15首を読む

佐佐木幸綱

今月の一連中にはたくさん動物たちが登場する、ここにある雉、狸のほか、猪、もぐらが出てくる。みな作者の畑に出入りするものたちである。特に追い払ったりせずに、ま、いいか、といった感じがこの作者らしくて、嬉しい。

散らかしたものの片づけるように秋 藪を一つ新しくする 細溝洋子

なかなか来なかった今年の秋。だからだと暑さがつづいていた感じを、上句うまく表現している。下句の展開、さすがである。

かざす手に音なく頁が立ちあがり妖精学の章移りたり 野見山鈴子

妖精学とはあまり聞いたことがない。どんな本があるのかネットでさがすと、『妖精学大全』『妖精事典』などという本もあるらしい。上句、妖精の仕業で不思議が起こった、となんとか読める。作者の工夫を買いたい。支離滅裂の雨にたたかれし露草の花色はありかたへを過ぎぬ 勝島靖夫

最近の荒つぽい雨の降り方を表現して「支離滅裂の雨」はなかなかの表現。そんな雨に叩かれてもなお、色を保持している露草。

わかれぎわたためらいながら握手せりなが年歌友でありしごとくに 陰山毅

本号には八月の神戸全国大会の歌がたくさんあるが、神戸で会った歌の友をうたった作の代表としてこの作を